

---

# 屈折光

工藤 斜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

屈折光

### 【Nコード】

N2474B

### 【作者名】

工藤 斜

### 【あらすじ】

家族って何だろう？と考える主人公の成長を書きました。

(前書き)

19のときに作ったので、稚拙です。  
だけど、稚拙なりの何かがあったらいいかな、と。

一番大切なことは、いつも心の奥底で必要なときに出てこない。こんなときは何て言ったらいいのだろう。狂った時計は容赦なく進む。

東京に行った姉ちゃんが突然帰ってきた。そのとき、俺はまたやよこしいことになる为核心していた。

俺には母と姉しか家族はいない。父親の顔は知らない。俺が小さいときに出て行った、と姉ちゃんが小学生のとき教えてくれた。母さんは夜の仕事をし俺と姉ちゃんを育てた。それには感謝している。でも、俺は母さんも姉ちゃんも嫌いだ。

「なんなのお〜？ アタシが帰って来ちゃいけないわけ？」

まず、この馬鹿そうなしやべり方も嫌いだ。別に、と言って俺は机に座る。明後日提出のレポートがまだ途中なのだ。

「あんたって、ほんと愛想悪い。何で帰ってきたの、とか聞かないの？」

姉ちゃんは寂しがり屋だ。俺が構ってくれないと絡む。面倒なので『聞きたくない』と答えてから手を動かした。そんな俺を尻目に、缶ビールを開けてつまらなそうに姉ちゃんは言った。

「アタシねえ、妊娠してんの。」

予感的中だ。

姉ちゃんは昔から基本的に奔放でだらしない。俺は姉ちゃんが何かするたびに、こんな人間になりたくないと思った。小学生のときは、気に入らないことがあるとよく茶碗をひっくり返した。中学生とき、ほしかったステレオを母さんにだめと言われたときだって散々怒鳴って出て行ったと思ったら三日後に突然帰ってきてケロッツとしていた。高校卒業してから、東京でフリーターする、と書置きして出て行ったかと思ったら突然さつき帰ってくる。かなりいいかげんだ。

とりあえず、妊婦の手から缶ビールを取り上げた。

「相手の人と結婚するんだろ、母さんには何て言うの？」と聞くと、姉ちゃんは黙り込んだ。その沈黙のせいで、俺は姉ちゃんの顔を帰って来てから初めてまともに見ることになった。

「シユンには言う。結婚はしないの。でも、赤ちゃんはおろしたくない。」

姉ちゃんは、初めて俺の前で顔を歪めて泣いた。静かな嗚咽だった。

姉ちゃんを俺の部屋で休ませてから、居間のソファで横になった。俺の口から母さんには言えない。どうせおろすしかないと言うに決まっている。俺はどうしたらいいのかわからない。一度授かった子供を殺すことは、姉ちゃんにとってショックが大きすぎると思った。姉ちゃんのことには嫌いだ。でも、またいつものようにいいだけ泣いて家出してから帰ってきて何もなかったように振舞う姉ちゃんを想像するともっと許せそうになかった。子供をおろしても、姉ちゃんは何もなかったかのように、ここに帰ってくるのだろうか。……畜生、眠れない。

俺が玄関のドアを開けて出て行くこうとすると、母さんが帰宅したところだった。

「朝飯、つくってあるから。」

それだけ言って、家を出た。母さんがいつてらっしゃいと言わなくなったのはいつからだろ。

俺と姉ちゃんを連れて母さんが田舎に帰ったことがあった。そのとき、ばあちゃんが俺に言った。

「俊輔、あんたしばらく見ないうちに俊樹さんに似てきて。男前になつたねえ。」

母さんは笑っていた。でも本当は悲しかったはずだ。悲しくないはずがない。置き去りにされたのだから。俺は母さんがかわいそうだと思った。

それからしばらくして母さんは酔って帰ってくるようになった。高校二年の秋、泥酔した母さんを介抱していると母さんは泣きながら、俺に言った。

「なんで私を置いていったの？　ねえ、俊樹さん。私にだめな女だから？　貴方よりこつちを優先したからなの？」

俺は、ムカムカした。胃の中から酸が逆流しそうなのを感じた。一度でもかわいそうだと思った自分が馬鹿だった。姉ちゃんのあの奔放さは、母さんのそれと同じなのだろう。でも母さんと姉ちゃんはいつも喧嘩ばかりだ。磁石のN極とN極が反発するように性質が同じ二人は仲良くなれないのだと思った。

そんなことがあってから、俺は母さんとあまり口を聞かない。母さんが悲しそうにするのは見ていて辛かったし、そんな母さんを見ていたら自分のことが嫌いになりそうだった。だから、俺自身が避けてきた。そのうち母さんは、朝になってから帰ってくるようになった。たぶん、他に男でもつくったのだろう。

要するに俺の家族はめちゃくちゃだ。最近、家を出て行くこと思っている。遊ぶのを我慢してバイトしてきたおかげで必要な経費がやっと溜まったからだ。この家にも、独りでいても結局は同じことだ。孤独には変わらない。このまま取り繕うよりも独りのほうがずっと気が楽だ。

大学の構内に入ったところで親友の仲嶋亜貴が声をかけてきた。

「おわつ。お前すげえ、クマ。実は俺も徹夜。」

適当に空いている席に座って、昨日の一件を端折りながら話した。いくら親友でもさすがに妊娠のことは言えなかったけれど。

「ここ、ええかな？」

僕と亜貴は頷く。初芝仁香とは度々、講義が一緒に知り合いになった。高校は大阪だったらしく、人懐っこくて中途半端な関西弁をつかう。本人曰く、今『標準語に直しているところ』だそうだ。その割にはおしゃべりだと俺は思う。

「市原君も亜貴君も寝不足なん？ ひどいクマ。」

「ほんと、心理学の先生、鬼だつて。俺、これ落としたら留年だよ。だから、必死。」

亜貴は途切れ途切れに話すから、俺でなくても寝不足なのが分かる。

「それは、亜貴の自業自得だ。でも、あの先生は鬼に違いないな。」

「あはは、市原君つて、ほんまにズバツと言うよねえ。」

甲高い声で笑う。俺でなくつても、彼女の笑いは関西のおばちゃんを思い起こしてしまうに違いない。……けれど、俺はそんなことは言えそうに無い。

「もつと言つてやつてよ。こいつ、いつもこんなんだぜ。俺、もうボロボロだよ。」

「市原君、もつと言つたつてえ。その突っ込みスカツとするわあ。」  
寝不足でボロボロの亜貴と、おばちゃんみたいに笑う初芝との他愛のない会話で僕は少し和らぐ。やはりあの家は息が詰まる。

「シユンは夏休み、どうすんの？」

「たぶんバイトかな。」

「なんだよー、少しは遊べよ。若いのに、不健康すぎるぞ。」

「気が向いたらね。」

「ねえ、合コンとかこん？ あたしも友達呼ぶから三・三くらいで。」

「いいねえ。俺もそろそろ、愛を探す旅に出たい、年頃だし。」

「何やそれ？ あいのりじゃないんやから。市原君は？」

「俺はパス。間に合つてマス。」

「うわあ、嫌味。ごめんね、シユンはいつも、こんなんでさ。」

亜貴が隣で俺を指差して、苦笑いした。

「あ、ええよ。無理には誘わんし。あの、あたしもう行かな。次、講義入つとるから。」

少し俯いて焦るように走り去る初芝を見て、亜貴はニヤニヤした。

「あれは絶対、お前に気があるな。」

「まさか。ないない。」

冷ややかに言った。気があつたとしても、変に気を持たせるつもりはない。

「彼女もちなのにもテて羨ましいかぎりだな。初芝に手出したら速攻、加奈ちゃんに言いつけてやる。」

ニヤつきながら、亜貴は分かっているくせに俺をからかう。いつものことだから、笑って答えた。

「だからないって。」

佐伯加奈は一つ下の後輩だ。同じ高校に通っていたが、今は女子大の英文科に通っている。高校の時から俺と亜貴と三人で仲がよかった。亜貴の彼女とグループデートなんかをよくしていた。俺が大学に入学してすぐに、加奈が付き合っただけと言ってきた。加奈には気を許せたから、付き合ってもいいと思った。加奈は二ヶ月前からアメリカに半年間留学することになった。今は遠距離恋愛中だ。

俺は、加奈のシャンプーの匂いを思い出していた。空港で涙目になりながらにつこり笑った加奈は、まるで昨日旅立ったばかりのようにはつきりと頭に浮かんだ。反面、昨日のことに鮮やかなのに、ひどく懐かしくもある。離れると、恋しいと思うのは俺が都合がいい人間だからなのだろうか。

講義が済んでから今日は二時間バイトをする。本屋のバイトだ。本を平積みしたり、発注したり、並べたりするだけ。その毎日繰り返す。辛くもないし、楽でもない。辞めたいとは思わない。単調な仕事は俺に合っている。そう思うということは、俺も結局単調な人間なのかもしれない。

玄関のドアを開けると、食べ物のおいがした。姉ちゃんのことだから、また何かやらかしていると思う。少なくとも、何かを焦がしたにおいではなさそうなので安心した。

「お帰りー。シュン、どうしよう。久しぶりに料理したら失敗しちゃったよ。」



姉ちゃんは苦笑いした。崩れたオムライスが台所の床にこぼれていた。またも予感的中。

「あーあ。もういいから姉ちゃんは座ってなよ。」

家が焼けなくてよかった。不幸中の幸いか。床を掃除しながらそう思っていた。

「ごめん。シュン、オムライス好きだったと思って頑張ったんだけど……。」

「泣くなつて。あんまり泣くとお腹の子まで泣き虫で自分勝手なのがうつるだろ。」

「あんたつて本当にかわいくない。馬鹿シュン。」

俺は振り向かなかつたけれど、姉ちゃんの声は嬉しそうだった。

姉ちゃんと向かい合って食事をしたのは久しぶりだった。姉ちゃんはすごくおいしそうにオムライスを食べた。

「シュンがいてくれてよかった。」

姉ちゃんはまた泣きそうになった。

「気持ち悪いな、急に。また泣くし。」

「アタシ、明日母さんに話してみるね。」

「ん。」

食器を洗いながら、振り向かず短く返事した。

昨日の徹夜のせいか、俺はうとうとと居眠りをしていた。携帯電話から聞き慣れたメロディーが鳴っている。受話器を耳に当てると、よく知ってる声が聞こえる。

「俊輔？ 久しぶり。」

加奈の声は少し沈んで聞こえてきた。

「……元気ない。どうした？」

「うん。なんでもないんだけどね。」

なんでもなくなくせに。

ずいぶん強がりの下手な女の子は俺が受話器の向こうで考えていることをお見通しだというように、静かにきり出した。

「お世話になつてる家族はみんな仲良しで、あたしにも優しくして…  
…あつたかいから何だか寂しくなっちゃったよ。日本の家族や俊輔  
や、亜貴君のこと思い出したら急に。えへ、らしくないよね。」  
「そんなことない。俺の前では無理して笑ってなくてもいいよ。」  
「やだ。何それ。俊輔ってそんなに優しくかったっけ？ ……でも、  
ありがとう。」

加奈はいつものように明るい声に戻ってから言った。

「よし、頑張るぞ。……ところで、俊輔は最近どうなの？」  
俺は思いつく限りのことを話した。明日で講義が終わって夏休みに入ること。同じ講義をとっている女の子に合コンに誘われたが断ったこと。少し旅でもしてこようかと思っていること。勝手におしゃべりになる自分に少しうんざりしながら、話し終わるとゆっくりと空気を吸った。それから…。

「急に姉ちゃんが帰ってきてさ。」

この二日間のことを話した。本当にいいかげんで適当ですぐ泣くんだ、姉ちゃんは。

「あはは。でも、俊輔いつもよりも穏やかなしゃべり方。何だかんだ心配しているんでしょ？」

無邪気に加奈は言った。俺には無邪気に笑う余裕はなかったが、彼女は沈んでいても余裕を持っている。

「まあね。」  
そんなことを考えながら、返事をした。

「俊輔のことは何でもわかるよ。いや、正確に言つとわかりたいのかな？」

へえ、とかわす。少しだけ意外な言葉に俺は内心驚きながらも、悟られないために。少し加奈がいじけて言った。

「どうせ、あたしの台詞らしくありませんよーだ。ふーんだ。」  
「そんなこと言ってないよ。わかるうとしなくても、大体は知っているだろ。」

俺は笑いながら答える。加奈は少し黙ってから静かに口を開いた。

「……嘘。俊輔はいつも大事なことは心の中。あたしね、時々悲しくなるよ。お節介かもしれないけれど、俊輔はもつといるんな人に心許してもいいんじゃないかな。あたしはもつとあなたの心の中が知りたい。」

加奈は何でも真つ直ぐだ。そんな加奈を愛しく思うのは、俺の何かが捻じ曲がっていても元には戻らないからなのだろう。

「……加奈。」

「ん？ 何？ また適当に誤魔化すの？」

「加奈が好きだよ。」

「え？ う、うん。改めて言われたら恥ずかしいな。」

ぎこちなく言った加奈の顔が目につかぶ。少し意地悪したくなった。

「それを期待して言ったんだけど。」

「え？」

「もつ言わないから安心していいよ。」

照れ隠しで聞こえないふりの加奈に、俺はふてくされて言った。

「あー、怒った。」

「怒ってないよ。そろそろ切る。明日、レポート提出だから。」

「絶対怒ってるくせに。今度はあたしからかけるね。あと、……あたしも。俊輔が好きだよつ。じゃ。」

受話器を置いたら、顔を真つ赤にした加奈の姿がふと頭に浮かんだ。

レポートは何とか間に合った。亜貴は予想通りにまたしても眠そうだった。空き時間に亜貴と話ながら俺は姉ちゃんのことを考えた。母さんと話せたのだろうか。母さんの答えがどうであろうときちんとすべてを話すことに意味があるのだ。姉ちゃんだってわかっているだろうと思っていた。

明日から夏休みだというだけで、景色も人も活気付いてみえる。浮ついてはしゃぎたいのはみんな同じなのだろう。バイトはしばらく入れないことにした。姉ちゃんのことのが心配だから、引越は見

合わせて旅行でもしてこようかと思う。俺は肝臓も強くないし、精神的にも亜貴みたいに合コン三昧に耐えられるほどタフではないのだ。

「シユンは何でこないんだよ。初芝が泣くぞ。」

「彼女には悪いけど、俺は加奈しか好きじゃないから。それに、本当に申し訳ないけどタイプじゃない。」

「ひどー。でも、言わずとしていることはわかる。」

顔を見合わせて笑った。はたから見ると亜貴は軽いタイプの人間かもしれない。十日前に彼女と別れたばかりでも、誘われれば合コンには喜んで参加する。俺にも『俺、振られちった。』程度で少しも落ち込んだ様子がない。俺が真面目に心配しても、ふざけて道行く女の子に声をかけている。切り替えが早い。でも、感性自体はよく似ているから居心地がいい。他の誰かがどう評価しようが、俺にとって亜貴は親友以外のなものでもない。

「なあ、シユン。俺はいいけど、加奈には何でも正直に言ってやれよ。」

「…何を？ 加奈が何か言った？」

「そういうわけじゃない。でも、もつと思ってること言ってやった方がいい。あいつはお前には言いたがらないし、他人には絶対に見せないけど、小さいときに母親亡くしてて相当弱くなった。俺、近所に住んでたからよく知ってるんだ。父親も母親が死んでから無理やり忘れようとしているみたいに、ますます仕事ばっかです。家族として機能してなかった。だから、あいつ極端に自分に対する信頼感とか、誰かから必要とされる感覚に飢えてる。」

亜貴は真剣に話すとき、暗闇で何かを手探りしているみたいに言葉を必死に探していく。人を傷つけないように、そんな亜貴らしい優しさが垣間見える。相手を思うあまり、無意識に重くない言葉で、違う言い回しでと心がけているように何度も何度もゆっくりと話す。「お前と知り合ってから加奈は変わったよ。元気になった。俺は嬉しかった。きつと、シユンに対して同じ様な何かを感じ取ったじゃ

ないかな。実際、お前んとも家庭環境は凄まじいと思うよ。でも、それ以上に加奈は家族を知らないんだ。だから、無意識に警戒してる。あいつ、本当はお前に嫌われるのが何よりも怖いんだ。」

加奈がいつも真っ直ぐでよく笑っているのは、加奈自身が俺にそれを求めているからかもしれないと思った。加奈がホストファミリーの温かさに敏感な理由がやっと理解できた。加奈は初めて人の温かさを感じたからなのだろう。

「加奈に昨日電話で言われたんだ。もっと話してって。俺はうまくかわしたけど、加奈は寂しそうな素振を見せなかった。亜貴が話してくれなかつたら、俺……。」

「ストップ。お前が落ちてどうすんの。俺はお前を落とすために言ったんじゃない。」

分かってるよ。でも、さ。

「俺は結局汚いんだ。人に関わっていたいのに自分を見せようと努力したことがない。」

「そんな風に考えるなよ。それは加奈も同じだよ。だから、気付かせてやってよ。俺、あいつのためにしてやれることは全部してやりたい。俺は一人っ子だし、加奈は一人ぼっちだから、昔からうちのお袋がよく世話やいてて。あいつのことは本当の妹みたいに思ってるの。」

「わかるよ。俺が亜貴の立場だったら、同じこと言うと思う。言ってくれてありがとう。もっと頑張ってみるよ。俺も加奈に嫌われるのは怖いけど。」

「シユンは馬鹿だなー。」

馬鹿って何だよ。馬鹿って。

亜貴が呆れたように笑う。

「加奈はそんなことで、お前のこと嫌いになつたりしないよ。朱実ちゃんと俺の関係とは違うんですから。わかってなあいわ。そんなこと気にしてたら本当に傷の舐め合いになっちゃうじゃなくって？」  
いつものふざけた口調に戻った亜貴に、俺はペースが掴めなくなる。

やはりこの男の本性は侮れない。

「加奈はそんなにキャパシティが小さくないんです。」  
ブリッコ口調でふざけながら、亜貴は口を尖らす。

「話し変わるけど、お袋さん、大丈夫なの？」

「うん。だいぶ元気出てきた。一時は、酷い落ち込みようだったけどね。」

亜貴の母親は元々病気だった。最近悪化したらしく、入院しているらしい。たしか再生不良性貧血という病気だったと思う。亜貴は暇さえあればお見舞いに行った。俺や加奈から見たら亜貴の家庭は普通で円満な方なんだと思う。父親は違う大学の考古学の先生で母親は元外資系の会社の受付嬢という組み合わせである。何不自由なく生きてきた。と亜貴は俺によく言う。実際、そんなことはないと思う。誰にだって、小さくても悩みはある。それに亜貴は母親の病院に通うようになってから、付き合っていた女の子（朱実）と別れた。それが直接の原因かどうかはわからないけれど。

「そっか。お大事に、って伝えて。」

「おう。旅行楽しんできなよ。帰ってきたら飲みにも行くこうぜ。」

亜貴にしばしの別れを告げて、俺が帰途についたのは日が暮れた後だった。姉ちゃんはきちんと母さんと話せただろうか。すつきりしたから、とか言ってもまた余計なことをしていなければいいな。

「ただいま。」

玄関を開けると、部屋の中は真っ暗だった。

「姉ちゃん、いないの？」

電気をつけて、俺は唖然とした。床に座り込んだ姉ちゃんと台風が来た後のような部屋。

「……シユン。おかえり。」

力なく言った姉ちゃんに俺は気が動転したまま言う。

「何があっただよ。」

「母さん、子供をおろせつて。あの人、昔から、何にも変わってない。アタシの話なんて聞こうともしない。だから、アタシめちやくちやにしちゃったよ。」

胃の奥のドロドロした吐き気を必死に抑えて俺はやっと口を開く。抑える、抑えるんだ。

「母さんが反対するのなんて分かりきったことだろう。まともな親ならみんなそう言うよ。今はそんなこと聞いてない。俺は、なんで部屋の中がこんなになってるのか聞いてるんだ。」

姉ちゃんは震えながら言った。低くて感情のこもらない声で。

「ムカついたからよ。シユンもあの人の味方なの？」

いいかげんにしてくれ。姉ちゃん、あんたは一体何様なんだ。

あんたの世界はあんたの一存で動いている。でも、俺は違う。ずっと閉じ込めておいたものが勝手に出て行った。

「いいかげんにしろよ！ 姉ちゃんも母さんも自分勝手に、いい加減で、それに振り回されてる俺や父さんのこと考えたことあるのかよ？ ……ないだろ？ 姉ちゃんは母さんが話を聞こうともしないつて言うけど、あんたたち親子はそういうところも何から何までそっくりだよ。」

俯いて押し黙っている姉ちゃんの下腹は微妙に膨らんで見えて、昨日よりも子供の存在感を俺に訴えているように思えた。母さんはこの子供を殺せと言った。俺は床に割れて転がった写真立てを拾いあげると、そつとゴミ箱に落としてから、部屋に戻った。いつか加奈がくれた俺の宝物だった。

いつもは心に閉じ込めたおいた怒りも、一度外に出るともう二度と閉じ込めることが出来なかった。この家にいたくない、という一心でひたすら鞆に荷物を詰めた。夜が明けたら真っ先に家を出ようと思った。出て行った父さんに恨み言を言いたかった。何で俺を置いていったんだよ、と。

夜明け前、空が白くなっていくのを久しぶりに見た。一晩考えたが、行き先は決まらない。でもここにはいたくない。

鞆を抱えて外に出ると薄暗くて今の気分には合致しているように感じた。駅前まで歩いて広場の縁石に腰掛けてから、薄くなつていく月を目で追つていった。

独りの時以外に心休まる瞬間なんてない。どこにも行きたい場所なんてない。誰にも会いたくない。生きていく気力はないが、死にたいとも思わない。なんて中途半端なんだろう。

日が少しずつ高くなって、忙しく通り過ぎていくスーツ姿の人達と、いかにもだるそうに歩いていく制服をきているローティーンが入り混じっておかしな集団ができる。右へ左へ流れていく。その滑稽さに、世界のすべてが馬鹿らしいものでできている錯覚に陥る。何もかも失ってしまったように、頭の奥が軋んだ。空っぽと痛みが支配する頭に、ふと爺の言葉が浮かんだ。

「俊輔、辛いときは誰かに頼つてもいいんだぞ。お前には母さんや小萩だつている。みんな家族なんだからな。」

俺は子供のときに田舎で捕まえた蛍のことを思い出していた。夏の夜に蛍を捕まえて壘に入れた。朝になると壘の底で蛍は死んでいた。蛍が死んだのは俺のせいだと思つた。死んだ蛍を埋めてから、俺は日が暮れるまで一人で泣いた。夕方、心配して探しに来た爺が俺に言つた言葉がまわりの雑音と頭の奥の軋みを止めた。

家族つて何ですか？ ……そんな当たり前のことが分からない。俺はどこで道を間違えたのだろう。急に暗闇で迷子になつてしまつたような、そんな気分になつた。

俺は飛行機に乗つていた。爺に会いたくなつたのだ。爺に会つて



何かが解決するわけじゃない。でも、そうせずにはいらなかった。幸い、貯めた貯金は百万近くあった。

空港から一步出ると湿った空気と肌を焼くように差しってくる。太陽光が懐かしかった。この前ここに来たのは三年くらい前だった。蒸し返すような湿度も、変わっていない。

バスに乗って街から離れていくと、次第に水田ばかりが見えてくる。青々とした稲、少し黒っぽく濁って見える水。水田の真ん中のバス停で降りて、十分程歩くと、変わらない爺の家が見えた。

爺に何て言おう。家出てきた、なんて言いたくはない。適当にあしらえばいい。どこかに旅行するついでに来た、とか。

深呼吸してから玄関のチャイムを鳴らす。扉を開けたのは婆ちゃんだった。婆ちゃんは驚きながら、俺を迎えた。

「あんたあ、俊輔かい？ すっかりでつかくなって。」

「婆ちゃんも元気そうだね。」

「あたりまえよー。あんたと小萩に子供できるまでは年取れんもん。」

そいつってニコニコしてから居間のほうに導く。

「ほれ、家、上がんな。爺さん、俊輔がきたんよー。」

婆ちゃんは先に家が上がって、爺に声をかける。居間の敷居を潜ると爺は座って西瓜を食っていた。

「おう、俊輔か。」

と無愛想に言うとか食べかけの西瓜に塩を振る。

「爺さん、塩は一回までって先生に言われとるじゃろう。」

氷の浮かんだ麦茶を俺の前に置いて婆ちゃんは注意する。爺はふん、ヤブ医者 of 若造が。と言って西瓜を齧る。婆ちゃんは俺に呆れて言う。

「血圧高いのは、ほんとのことじゃ。あんたはこの子らが家庭も持たんうちに死ぬる気かあ？」

俺は少し笑う。爺は決まり悪そうに俺に尋ねた。

「…何しに来た。」

「ん、旅行ついでにきた。」

「嘘言え。…俊輔は何もなかったらこんなところ来ん。」

本当のことを言うべきか、沈黙のまま俺は戸惑った。

「爺さん、そんなこと聞かんでも。…何もええ、そんなこと始め  
つからわかつとる。言いたくなかったら、言ったらええ。」

俺を察して婆ちゃんが言った。爺は仕方ない顔で言った。

「言いたくなるまで、家にいろ。言つまで旅行は許さんぞ。」

「爺、ありがとう。」

また気難しい顔で爺は立ち上がる。

「タバコ買ってくる。」

爺が出て行ってから、婆ちゃんが俺にこっそり言った。

「爺さんはあんたが来て嬉しいんよ。最近タバコなんてしばらく吸  
うとらんもん。」

いかにも爺らしくて俺は婆ちゃんと一緒にくくくと笑った。

夕暮れが辺りを染めていた。俺は、縁側に座って夕食までの時間  
を潰していた。爺の家の庭は何もないが、針葉樹が何本か植わって  
いる。どれもきちんと刈り揃えられている。爺は意外にまめなのか  
と思ってみる。当の爺本人はさつきから夢中になって新聞の地域欄  
を虫眼鏡で覗いている。遠くでカラスが退屈そうな声で鳴いていた。

夕食を食べながら、婆ちゃんが俺にいろいろ聞く。大学で何を勉  
強しているか。食事はきちんとか食べているかとか。どこに就職して  
なにをしたいとか。恋人はいるかとか。母さんは元気かとか。

情報関係と環境問題と福祉とあとはいろいろ。割とご飯は食べてい  
る。何をしたいかはわからないけれど、勤めるなら広告会社とかが  
いいかな。一応、付き合ってる子はある。（それ聞いてどうするん  
だろう。）母さんは元気なんじゃない？ 朝出掛けに顔を合わせる

ただだから、よくわからないけど。

「小萩はどうしとるん？ 東京行ったんであるっ？」

「この前、帰ってきたよ。」

やはり姉ちゃんの話は避けきれないと思った。うまく切り抜ける方法を探す。

「どうせまた、小萩と喧嘩したんじやろう？ほんとにあんたらは意見だけは正反対じゃけえねえ。でも、考え方はほんとに姉弟よ。よう似とる。」

婆ちゃんの答えに驚いた。俺と姉ちゃんが？

「お前らは、同じだ。ちよっと前、小萩もひとりで訪ねてきて何をするわけでもなく、しばらくいたぞ。」

呆れたようにニユースを見ながら爺は言った。コップに焼酎を注ぐ。

「そーよ。何にも言わんで帰りよったけどの。」

婆ちゃんは心配そうに続けた。

「俊輔、何か知つとるんじやろう？ こんなもつろくした爺さんと婆さんじゃけど、心配だつてするんよ。紗雪があんなんじゃけえ…

…余計よ。」

婆ちゃんは今もう笑っていなかった。母さんのことでやはり何か責任を感じているのか。よくわからないけれど、話さずに食事を終えることはもう無理だった。俺はコップに注がれているビールを飲み干して言った。

「姉ちゃんに子供が出来たんだ。けど、誰の子か教えてくれないし、結婚しないで子供を育てるって言うてる。」

「…そんなん、できんに決まってる。」

爺は吐き捨てるように言った。婆ちゃんは驚いて言葉も出ずに苦々しい顔になる。

「母さんは当然おろすしかない、って言った。姉ちゃんはいつもの通り。絶対おろさないって癪癪起こして家の中がめちゃくちゃ。今までは我慢できたのに、俺、急に我慢できなくなって出てきたんだ。」

「……すまんのう。私も爺さんもこればかりはどうもできん。俊輔も辛かったじゃろう？小萩はあんただけでも味方してくれて嬉しかったはずよ。」

そうだろつか。姉ちゃんはその時、俺に対して落胆したように思えた。俺は姉ちゃんの気持ちが一番わからない。

風呂上りなのに、俺の頭はひどく冴えている。眠れそうにない。縁側に座って星を見ていた。遠くから子供のはしゃぎ声と花火の音が聞こえた。俺は、姉ちゃんと一緒に花火をしたことを思い出した。やはり姉ちゃんは線香花火がすぐに落ちてしまつとか、ちよつとした理由で癩癩を起こした。

でも、俺が線香花火を最後まで落とさないで終わらせると自分のことみたいに喜んだ。馬鹿みたいにはしゃいだ姉ちゃんは今どこにいるのだろつか。

ポケットの携帯電話が振動する。俺の回想は一旦中断されて現実に戻り。思い出は振り返るからこんなきれいだ。

『人間の記憶は曖昧で都合のいいものだ』

……この前のレポートに書いた気がする。

「はい。」

「誰だかわかる？」

わからないはずはない。

「今どこなの？」

「爺んとこ。」

え！と言つてから、加奈は深刻そうに言った。

「何かあったの？家の電話にかけたら小萩さんが出てね。昔話に花が咲いちゃったんだけど、俊輔の行き先は知らないからケータイにかけて、って言われちゃった。」

「ああ、家にいないから。勝手に出てきたし。」

「小萩さんと喧嘩したの？なんか、ごめんなさいって言えなかった、って言つてたよ。あと五分いてくれたら言えたのに、って。」

何が五分だよ。喧嘩なんかじゃない。八つ当たりする姉ちゃん

に一方的に愛想が尽きただけだ。

「だめだよ、俊輔。たぶん考え方は俊輔のほうがずっと大人なはずなんだから。我慢しなさいとは言わないよ。でもね、小萩さん、今俊輔が味方してくれなかつたら本当に子供おろしちゃう気がするよ。全然元気なかつたし。……あたしが口挟むことじゃないけど、命は大事だよ。誰かの一存で生きるか死ぬか決まっちゃうなんておかしいよ。……誰だつて死にたくて生まれてくるわけじゃないのに。」  
加奈は少し涙声だった。加奈の母親は幼いときに亡くなった。……  
亜貴の話进行出した。

「俺だつて殺したくない。……殺したくないんだ。でも、何も出来ない。無力だ。俺が姉ちゃんより早く生まれてきてたら、子供も姉ちゃんも養えたのにか。父さんが出て行かなかつたら……とか。……姉ちゃんが東京なんて行かなかつたら……とか。……何回も考えて、それでもすでに、全部起こってしまったことで取り戻せないんだ。加奈にはわかる？ 俺の無力感が。……惨めだよ。きっと俺みたいな人間を惨めつてみんな蔑むんだつて思わずにはいられない。」  
加奈は黙っていた。そして長い沈黙の後、ゆっくり話し始めた。

「……惨めなことは、いけないことなの？ そんなの違うよ。俊輔が決め付けてるだけだからでしょ。それは、今まで俊輔は誰にも惨めなところを見せたことなんてなかつたからでしょ？ 見せないようにずっと無理してたからだと思う。……不謹慎かもしれないけどね、今、あたしは嬉しいの。俊輔が一生懸命にもがいてることを見せてくれて。俊輔はいつもあたしに『俺の前では無理して笑つてなくていい』つて言ってくれる。初めてそう言われたとき、俊輔があたしの心の拠り所になってくれるたつたひとりの人だったんだ、つて思ったの。でも、俊輔は？ つて。あたしのこと心の拠り所つて思ってくれているかな？ と思った。何度もあたしじゃだめなのかもしれない、つて思った。留学することに決めたのは近くにいたら、考えてばかりで辛くなると思ったのも理由なの。……でも、違つた。離れたら余計心配になつた。このまま、必要とされなくなつてしま

「……生きていけないのはあたしなのに、って。」

加奈はいつもよりも静かに優しく言葉をつなげていく。普段はこんな風にはしゃべらない。短い言葉を選んでうまくしゃべる。でも、今はあえて出来るだけ、思いつく限りの表現を使おうとしているように見える。

「でも、俊輔が弱いところを、初めて見せてくれたからあたしは嬉しい。『ああ、よかった。俊輔はあたしを必要としてくれてるんだ。』って思えた。」

俺は加奈を救う存在になりたい、といつも思っていた。でも、救われていたのは俺のほうだった。こんなにも誰かに愛されていたなんて、ずっと分かっていなかった。

「……俺、本当、情けなくて独りよがりだよな。加奈にこんなに大切に思われていたこと、全然わかってなくて。ごめん。本当に馬鹿だ。」

何十年ぶりに目から涙を流していた。泣くことを忘れたときに、一緒に誰かを愛することを忘れてしまったのかもしれないと思った。何にもわかっていなかった。俺が自分から隔てた世界が家族みんなをバラバラにしていたのだ。自分から歩み寄ろうとさえしていないかった。俺は結局、姉ちゃんと何も変わらない。自分勝手に避けてあきらめていた。嫌なことから逃げて自分を守ってきたただけだ。

「……俊輔、泣いてるの?」

俺は何も言えなかった。加奈は泣きながらそつと言った。

「ごめんね。留学しなきゃよかったな。俊輔のそばにいたら、ちゃんと涙を拭ってあげられるのに。抱きしめて大好きだよって言ってあげられなくてごめんね。」

「……その言葉だけで十分だよ。」

やっと話せた一言は心を軽くしていた。

「明日、帰ろうと思う。姉ちゃんのこと心配だし。姉ちゃんがどうしてシングルマザー宣言したのかも聞いてなかったし。」

「うん。……俊輔なら頑張れるってあたしは信じてるから。遠くか

ら応援してるよ。」

「できるだけはやってみるよ。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみ。」

電話を切ると電池は切れてしまった。いつもなら苛立ってしまいそうだが、何故かすつきりしていた。

眠れない俺はベランダに座り込んで、風に当たっていた。遠くの田んぼで小さな光が暗闇に浮かんでいた。蛍の命の輝きは、俺が最後に泣いたあの日と何一つ変わらない美しさだった。爺があの時、俺に言った言葉の意味がやっとわかった気がした。

朝になって目を覚ますと、空は晴れ渡り蝉の音が響いていた。一階に下りて顔を洗ってから居間に行く。爺がテレビを見ながら、寝転んでいる。

「とつくに飯の時間は過ぎたぞ。」

「何も、いつも早く起きとるんじゃないやけえ、夏休みぐらい寝とつてもええんよ。爺さんもゴロゴロせんで少し動いたらええ。」

爺は不機嫌そうにつぶやく。

「外さ出たら暑いから、具合悪くなんだ。血压高いとくらからすんべさ。わしが死んだら小萩の子供の名付け親がいなくて困るだろうが。」

俺は婆ちゃんと顔を見合わせて笑った。爺は姉ちゃんが子供を生むことについて反対してないらしい。

「そう言われたらそうさねえ。今日は爺さんに一本取られよったあ。」

婆ちゃんは、あははと笑った。俺もおかしくて笑った。

帰るとき、爺と婆ちゃんは玄関先まで俺を見送った。婆ちゃんは「ちょっとだけ」と言っただけで姉ちゃんのためにお金をくれた。俺は姉ちゃん、喜ぶよ。と言って二人に手を振った。相変わらず、秋田の

夏は暑かった。

来たときと同じバス停でバスに乗り、空港に向かう。空港からの列車で駅に着くと、もう夜だった。家に着くと深呼吸からしてドアを開けた。

「ただいま。」

家の中はきれいに片付いていた。居間に行くとテーブルに母さんが座っていた。手にはウイスキーのグラスが見えた。

「おかえり、俊輔。」

少し酔ってはいるが、母さんは俺をきちんと認識していた。

「姉ちゃんは？」

「どこ行つてたの？」

俺の質問に答えず、母さんは違うことを聞く。仕方なく答える。

「爺んとこ。」

「父さんと母さん元気にしてた？」

「うん。母さんのこと心配してた。」

「そう。」

「仕事は？ 休みなの？」

「休んだ。ねえ、付き合つてよ。一人で飲んでもつままないのよ。」俺は黙つて向かいの椅子に腰掛ける。コップに氷とウイスキーをいれて母さんのグラスにそつとつける。無機質なガラスの音が部屋に響いている。

「私つて、だめな母親ね。あんたは我慢強いから、小萩みたいに喚いたりしなかったけど、いつも失望の目をしてたからね。」

どう言つていいのかわからなかった。確かにこの前までは失望していたし、嫌悪していた。今だって、母さんに対して感じている気持ちをうまく整理することができていないのだ。

「言わなくつても、わかるわよ。当ててみようか？ 『母さんなんか大嫌いだ。自分勝手に父さんが出て行ったのもあんたのせいだ。』

…どう？ 当たつてるでしょ？」



この前までそう思ってたよ。とだけ言った。

「あんたは俊樹さんに顔だけじゃなくって、心まで似ちゃったのね。あの人が出て行ったのは俊輔が二歳のときだから、全然知らないのね。私のこと憎んだっていいのよ？ その方がずっと楽……。」「母さんは不器用なだけで、本心は姉ちゃんの子供だって産ませてやりたいんだろ？」

確信付いたことを言ってみる。母さんは俺の母親だ。姉ちゃんのこと考えてないはずはない。……今は自然にそう思えた。

「あんた、ほんとにあの人の子供だね。知らないうちに何でもわかるようになって。」

母さんは遠くを見たまま、グラスに口を付けた。目元が姉ちゃんとそっくりだ。

「家族じゃん。母さんは俺と姉ちゃんの母さんだから。そう思ったんだよ。」

また遠い目で、母さんは呟く。

「……小萩には苦労させたくないのよ。俊樹さんと別々に暮らして子供育てるのは大変だったわ。俊樹さんは、あたしと一緒に暮らそう、って言ったけど私は子供や家族の幸せよりもあの人の夢のほうに大事だった。」

「父さんは何で出て行ったの？」

少し潤んだ目の母さんは、グラスの氷を揺らしながら話し続ける。

「貴方の父さんはね、立派な刑事だったの。アメリカから誘いが来てね。家族みんなでアメリカに行こうって言うてくれたの。でも、私は英語も話せないし、こんなんだから、きっと俊樹さんを自由にさせてあげられないと思ったのよ。それでも構わない、ってあの人は言うてくれた……。私は弱かった。俊樹さんの愛情を真っ直ぐ受け入れられなかったのよ。」

頬杖をついたまま、母さんはグラスを置いた。

「彼はひとりでアメリカに旅立って言った。あの人が出て行ってから、私は一度も手紙も電話もしなかったわ。……だけど、一度だっ

て忘れたことはない。籍も入ったままだし、今でも逢いたいって思ってる。私はまだ幼いあなたたちにそんなこと言えなかった。なんて言ったらいいのかわからなかったのもあるし、自分でどこか弱い自分を認めたりしたくなかったんだと思う。今だから、言えるけど。せめて、お金のことで苦労はさせまいって夜の仕事して、スナック経営も任されるようになって、何とか二人とも成人してくれて店も軌道に乗ってきて……。でも、気が付いたら家族はみんなバラバラでもう取り返しが付かなかった。」

母さんは泣いていた。

「貴方達には苦労させたくないって思ってたのに、小萩はシングルマザーになるって聞かないし、俊輔はバイトでお金貯めて家から出て行くこうとしている。お金の心配なんかよりもっと大切なものがあったのに……。私がダメな母親だから、二人とも苦労ばかり。父さんにも母さんにも心配させてばかり。」

「母さん、泣かなくていいよ。後悔するのはまだ早いんじゃない？ またみんな一緒に暮らすのは無理かもしれないけどさ。……全部話してくれてありがとう。俺、今から姉ちゃんに会いに東京行くよ。姉ちゃんがたとえシングルマザーになってもみんなで助け合えるよ。だって家族だもん。だから、姉ちゃんを連れて帰ってきたら笑顔で『お帰り』って言ってあげてよ。」

母さんは頷いてから、立ち上がった俺に『いつてらっしやい』と言った。

うだる様な暑さに気を失いそうになる。と言っても、大学受験ですべり止めに東京の大学をいくつも受けた。だから、二週間近く暮らしたこの街のことは人並みに知っている。この街ときたら、何もかもぎゅうぎゅう詰めにすればいいという考え方だ。埃っぽい空気と耳障りな騒音と路の端をうめる人並み。この街で、人は何を安ら

ぎにして暮らしているのだろう。そんなことを考えながら、姉ちゃんの家を探す。

『引つ越しました』と書いた葉書が家に届いたとき、俺は不審に思った。西新宿の文字が目に入ったからだ。西新宿はビルや高層マンションが多い。フリーターの姉ちゃんがそんなところに住めるはずないのだ。あれだけ嫌っていた母さんと同じ仕事を選ぶとは考えにくかったし、そんなに金になるバイトなんて考えられない。何かがおかしい。

予想通り、姉ちゃんのよこした葉書は高層マンションの住所を示していた。またしても予感の中で、俺はまた溜息が出る。

一階のエレベーター前で、書かれている部屋のインターフォンを押す。

「はい。どちらさまでですか？」

何故か男の声が返答し、俺はうるたえる。姉ちゃんはでたらめな住所を書いたのだろうか。

「あの、市原小萩さんのお宅ですよね？」

「ええ、そうですが。……彼女は今、しばらく実家の方に帰省していて留守なんです。お急ぎのご用件であればお伺いしますよ。」

姉ちゃんは帰ってきていなかった。それにしてもこの男は誰なんだろう。俺の頭にはまたしても嫌な見解が生じていた。姉ちゃんの恋人……。

「実は、実家のほうでも姉は行方をくらましておりまして。何かご存知ありませんか？」

「小萩が？ わかりました。今鍵を開けます。上がって来てくださ

い。」  
男の声は少し調子を変えた。驚きは隠せないようであったが、比較的、冷静で穏やかだった。

ドアの前でベルを鳴らすとドアが開いて男が俺を招き入れた。声の主は予想通り、清潔感のある品のいい男だった。どこことなく日本人

離れた端正な顔立ちだった。ハーフか？

「『姉』ということは、君は俊輔君だね。」

「申し遅れました。姉がお世話になってます。弟の俊輔です。」

「僕は……」

男はおもむろに名刺を差し出す。『鈴木 凌』。

「鈴木凌と申します。」

『たかし』ね。

「いや、こんな丁寧に自己紹介してもらわなくても。俺まだ学生ですから。」

俺は、困惑気味に訴えた。

「ああ！ ごめん。つい仕事の癖で。小萩にも『その嫌味な癖、直しなさいよ』って叱られました。」

苦笑いの鈴木さんを見て、変な人だけど、悪い人ではないように思えた。

「実は、小萩は僕が仕事から帰ってきたら、書置きを残していなくなってたんです。」

「姉ちゃんは実家に帰ってきたんですけど、三日くらい前からいなくなっちゃって。」

「実家で何かあったんですか？」

「喧嘩したんです、俺と姉ちゃんが。」

「姉弟喧嘩くらいでいなくなるようなことはないですよね、普通は。」

「姉ちゃんは普通じゃないからな。」

鈴木さんは苦笑いのまま言う。

「小萩がいくら不思議なコでもそれはないもんね。いなくなったとしても、ご飯の前には帰ってくるよね？」

俺は頷く。鈴木さんは姉ちゃんのことをよくわかってきているようだ。

「心当たりはあるんです。俺と喧嘩になる前に母さんが、結構、厳しいこと言っただけだから……。」

「どんなことを？」

俺は一瞬ためらった。この人と姉ちゃんの間の子供をおるせ、と言ったなんて話していいものか。そんな俺の様子から察したのか、鈴木さんは真剣に訴える。

「小萩、実家に帰る前はとても体調が悪くてね。その日は病院に掛かるように言っただ。もし、どこかで悪いんだつたら隠さないで教えてくれないか？」

唇が鉛のように重かった。気の進まない言葉はこんなに重い。

「姉ちゃんは、母さんに子供を……子供をおるすように言われたんです。」

俺は鈴木さんの顔を見ることが出来なかった。うつむいていた。

「……子供？ 小萩は妊娠してるのかい？」

鈴木さんは驚いて言った。冷静さは失われていた。姉ちゃんはこの人に子供が出来たことを話していなかったら良かった。

「……姉ちゃん、話していませんでした。妊娠しています。お腹もよく見たら少し出ているし、実家でも眠ってばかりいます。」

「どうして、……どうして僕に言ってくれなかったんだろう。」

鈴木さんは頭の中で何かの断片を探しているみたいだった。どこを見ているというわけでもなさそうな目をしている。長い沈黙の後、鈴木さんは言った。

「……少し、独りにしてもらっていいかな？ 外出てくるから留守を頼める？」

僕はわかりました、と返答した。

「二時間くらいで戻るから、好きに使って。冷蔵庫のものは勝手に食べていいし、眠くなったら廊下の奥のドアが来客用の部屋だから電話とインターフォンは無視していいよ。」

「ありがとうございます。」

鈴木さんは不思議な人だと思う。若いのにこんなに広い家に住んでいて、いきなり訪ねてきた恋人の弟を名乗る青年を独りになりた

い、と言って追い返さずに自分が出て行く。本当に不思議な人だ。でも、彼の人格には好感が持てた。物腰が柔らかくて、年下の俺にも礼儀正しい。少なくとも俺が嫌う部類の大人ではないはずだ。

広いリビングを見回すと、本棚の一角に写真立てがあった。ひとつは鈴木さんと家族らしき写真。隣に座っている妹、その後ろに日本人の母親と白人の父親。絵に描いたような家族だ。もうひとつは鈴木さんと姉ちゃんが一緒に写っている写真。姉ちゃんはとても女らしく見えた。俺は姉ちゃんのそんな顔を初めてみた。そしてその影に、姉ちゃんが小さいときの写真があった。母さんと姉ちゃんと赤ん坊の俺を抱きかかえた男の人。この人が父さんか。父さんを見たのは初めてだった。自分と瓜二つの男の人、父さん。今どこで何してるんだろう。そんなこと考えて、父さんが帰ってくるわけじゃないけれど、少しだけ母さんと姉ちゃんのことがかかって、家族の温かさみたいなものがこみ上げてきたような気がした。

冷蔵庫の中のアイスコーヒーをもらって飲んだ。急に喉が渴いていたことを思い出したからだ。男の一人暮らしらしくないきれいさだと思った。姉ちゃんの方がずっとだらしないな、とひとり言を言う。つてから、ソファアに腰掛ける。

姉ちゃんはどうして鈴木さんに話さなかったのだろう。あの人なら姉ちゃんのこと、子供のことも幸せにしてくれる。俺はそう思う。夕方になって空腹になったので、何か食べようと思った。冷蔵庫にはいろいろなものがあった。……俺も姉ちゃんも昔はオムライスが好きだった。おいしそうにオムライスを食べて、それから涙を流した姉ちゃんが思い浮かんだ。

どこかで泣いてなきやいな。

オムライスを皿に盛り付けていると、鈴木さんが戻ってきた。

「遅くなってすまなかったね。」

いいえ、と首を振ってからテーブルに二つの皿を運ぶ。

「あ！ オムライスだ。小萩がよく言ってた。『俊輔がつくつてくれたオムライスが大好きなの』って。」

俺は恥ずかしくなってるってどんな顔をしたらいいのか分からなかった。姉ちゃんは何言ってるんだろう。鈴木さんは自分の部屋で着替えてきてから、冷蔵庫を開ける。外国の瓶ビールを出して僕の前に差し出す。

「ちょっと待ってね、栓抜きとツマミ持ってくるから。」

そういつてキッチンへ戻る。テーブルに戻ってきてから、鈴木さんは栓抜きで二本のビールの蓋を外してから僕に渡して言う。

「乾杯。」

僕は瓶を合わせてから一口飲む。外国のビールは何度も飲んだことはあったけれど、今まで飲んだどれとも違った味がした。

「じゃあ、いただきます。」

鈴木さんはそう言うてから、オムライスを口へ運ぶ。俺はただ見守る。

「なんか、おいしい。」

「なんか、って何だ？ 本当に変な人だな。」

「なんか、俊輔君の人格が出てるね。」

え？ 『こんなとこまで小萩のことを心配して来ちゃう優しさ、みたいな味がするんだよ』とよくわからない褒め言葉を言ってる鈴木さんは笑った。

オムライスを全部食べてしまうと、俺と鈴木さんは二本目のビールを開けて話をした。

「鈴木さんと姉ちゃんはどこで、どんな風に出会ったんですか？」

鈴木さんの勤めてる会社は外資系の企業ですよ？ 姉ちゃんはそんなたいそうな仕事してないみたいだし。何も接点ありませんよね？」

「やだなあ、鈴木さんなんて呼ばなくていいよ。凌つて呼ばれたほうが楽なんだよね。鈴木って養子に入ったもんだから、あんまり実

感なくて。……そうだよ。普通はそう思うよね。ほんとに接点ないものね。」

「すいません、突っ込んだこと聞いてしまつて。」

「いいんだよ。僕が話したかったから話したんだ。言いたくないことはわざわざ言わないよ。時間はたくさんある、出来るだけ君には知つて欲しい。」

俺は頷く。

「僕と小萩が出会つたのは今からちょうど一年二ヶ月前だつた。その日、僕は嫌なことがあつて、一人で飲み明かそうと思つていた。深夜のバーで、カウンターに一人で座つてるとよく女の子に声をかけられる。その日も、何人かの女の子が僕に話しかけた。でも、僕はどうでもよかつた。どんなに飲んでも酔えないし、明日のビジネスのことを考えたら気が気じゃない。だからろくに受け答えもせずに水割りを飲み続けた。

人も減つてきた二十五時頃、四人目に声をかけてきた女の子はずいぶんねばつていた。早く帰つてくれないかな、と思つていた矢先に小萩がドアを開けて店に入ってきた。『マスター、私にいつもの黒いドレスに白のコートを着た小萩はそう言つてから、僕の二つ空けた隣の椅子に座る。その店には何度も行つていただけけれど、小萩を見たのは初めてだつた。運ばれてきた水割りを一気に飲み干してから、息を吹き出して頬杖を突く。何故だか分からないけれど、それだけの動作で僕は彼女に釘付けになつていた。隣の女の子はただの騒音だつた。面倒だから、僕は全部英語で答えた。女の子は僕の胸元に水をかけて出て行つた。僕がハンカチを取り出して胸元を拭いていると、小萩が『貴方つて、大馬鹿ね。』と言つて笑つた。

いいんだよ、どうせ向こうだつて本気じゃないんだから。と僕は答えた。『そうかしら?』『そうだよ、だつて本気だつたら僕が何をしても真剣に聞くだろう。君は本気の時、相手の男が全部英語で答えたらいきなり水をかけたりする?』つて聞き返した。そしたら彼女



なんて言ったと思う？ 『あたしなら、きつとアメリカに行こうっていうわ。』だって。」

いかにも姉ちゃんらしい突拍子もない答えだ。インテリというより、ぶっ飛びな表現だ。

「それから、僕は仕事帰りに彼女と何度も一緒に飲んだ。一ヶ月くらいして勇気を出して小萩を食事に誘った。小萩はとてすんなり了解してくれた。『でもねえ、あたし、凌にひとつだけお願いしていい？』もちろん。『なんかオシャレなレストランとかじゃなくって、居酒屋さんみたいなのがいいな。』当然、君の行きたいところに行くよ。そうだな、仕事帰りのオジサンがたむろしてるようなところならどう？ 『いい！ 最高。』じゃあ、決めた。焼き鳥がおススメなんだよね。『やったあ。』水割りを飲み干しておかわり！ と叫んでから小萩はにっこり笑った。それから付き合うことになって、半年前から同棲してる。」

「姉ちゃんは、何の仕事してたんですか？」

「家族には言っただけだったんだね。小萩はモデルをやってたんだ。姉ちゃんはちゃんと夢を叶えていた。俺や母さんの見ていないところでちゃんと真面目に生きている。俺は知らなかったとはいえ、少し姉ちゃんに申し訳ない気がした。」

「表紙にこそならなかったけど、結構、雑誌に出てたんだよ。最近体調が悪くて仕事は減らしていたみたいだけど。」

「凌さんは少し悲しそうな顔で言った。」

「姉ちゃんは、シングルマザーで産むって言ってたんです。それが俺にはわからなくて。」

「たぶん、それは僕を気遣って言ったんだと思う。実家に帰るって書置きを残していなくなる前日に、僕は海外赴任のことを話したんだ。一緒にきてくれないか？ ってプロポーズまでした。だから、てっきりお母さんに相談しに行ったようつもりだったんだ。」

海外赴任……。姉ちゃんは何から何まで本当に母さんにそっくりだ。

どうして、俺達家族はこんなにみんな不器用なのだろう。  
俺は生まれて初めて家族の幸せを願った。

夜中、トイレに行きたくなって目が覚めると、凌さんは眠れない様子だった。凌さんはソファーに座ったままでいた。ずっと遠くを見たまま、俺に言った。

「僕が養子に入ったのは、中学二年の冬だった。その年に僕以外の家族は、飛行機の事故で亡くなったんだ。事故のことは覚えていない。でも、病院のベッドで目が覚めたら、ものすごく痛くてShit！って叫んだ。肋骨が折れて両足も折れて体中傷だらけで、ところどころにやけどをしていた。どうやら、僕は二ヶ月も眠ったままだったらしい。僕は日がたつごとに回復したけど、一向に、母さんも父さんもルナも誰もお見舞いにこなかった。寂しくて限界に近づいた時、一人の男の人が僕を訪ねてきた。鈴木さんという人で、父さんの仕事のパートナーだった。どうやら、父さんは仕事柄、飛行機に乗る回数が多くて心配性のせいも手伝って鈴木さんに『家族を願います。』と言ったらしかった。その約束を誠実な鈴木さんは守って僕を引き取ってくれた。こうして、僕は鈴木凌になった。養父さんも養母さんも血の繋がっていない妹も、僕に優しく温かかった。僕は物心ついた頃から何でも挑戦してこなすことができた。そのことが、嬉しいと思ったことはなかったけれど、僕は何でも挑戦した。何でも出来るのは、『何でも頑張ることが出来るように神様が才能を授けてくれたからなんだ』と信じていたしね。僕が頑張ることで、彼らに心配かけずに済むのなら、とも思っていたよ。でも、結局は辛かったんだと思う。いつも頑張りが、すべていい結果になるとは限らないからね。知らないうちに僕は無理をしていたんだ。その頃、小萩に出会った。小萩は疲れきった僕を見て呆れながら『そんなに無理しなくても貴方を引き取ってここまで育てたんでしょ？ だったら、養父さん達は凌のこと認めてくれてるよ。』って言うてくれた。彼女にとっては何でもない一言だったかもしれない。

ないな。でも、僕は嬉しかった。それから、養父さんは先月、癌で余命半年って告知を受けたんだ。だから、知って欲しかった。愛する人がいて、幸せなことで、『ちゃんと父さんとの約束守ってくれたこと、感謝しています。』ってことを。」

そこまで言つと、凌さんは外のビルの明かりをずっと見つめたまま黙った。

俺は、静かに立ち上がって、

「おやすみなさい。」

と言った。凌さんは、俺に聞いてほしかったのだろう。でも、愚痴はひとつもなかった。今まで、愚痴を話したことなんてなかったに違いない。どんな風に愚痴や弱音を話していいのかわからないみたいにも思えた。

次の日、朝食を食べながら凌さんと俺はこれからのことを話した。

「小萩が見つかったてくれたらいいんだけど、探そうにも当てがないから困ってるんだ。携帯電話も置いていってるみたいだし。僕は、一週間後にアメリカに経たなくてはならないんだ。今も、引越しの準備とかで会社が休みをくれてるから時間だけはたくさんある。ギリギリまでは待つてみるよ。それで小萩が帰つてこなかったら、俊輔君に頼みたいことがあるんだ。」

「何ですか？」

「これを小萩に渡して欲しい。」

差し出されたものは、ベルベット地の箱に入っていた。中身は開けなくても容易に想像できた。蓋を開けると、オレンジ色の宝石とダイヤモンドが使われた指輪が現れた。

「僕はたとえアメリカに行つても、小萩だけを愛していくからって小萩が迷惑でも、他の誰かと結婚しても、ずっと気持ちは変わらない。……そう伝えてほしい。」

「どうしても、姉ちゃんが見つからなかったらそうします。……でも、姉ちゃんが帰ってきたらアメリカに行つてもらいたいんです。」

だって、そうでしょう？ 残ることが幸せなはずないんです。姉ちゃんのことだから、また余計なこと考えてると思っんです。」

凌さんは俺が感情的になったのに驚いたようだった。それから、口の端で微笑を浮かべて言った。

「君と小萩は本当にそっくりだ。特に、悲しそうな顔が。そんな顔されたら、小萩を意地でも連れて行かなくちゃならないなあ。」

そこまで話すと、玄関のドアが音を立てた。靴を脱ぐ音。

「凌？ 誰か来てるの？」

そう言っつて、リビングに現れた姉ちゃんはモデルの顔だった。俺を見てからこともなげに言う。

「あれえ？ シュン、あんたこんなところでなにしてるのよ？」

あんたを探しに来たんですけど、と俺はつぶやく。

「え？ 何？」

「何でもないです。」

「小萩、おかえり。どこ行っつてたの？」

凌さんが尋ねると、姉ちゃんは笑っつて言った。

「うん、事務所に掛け合いに。契約破棄についてね。」

「仕事辞めるのかい？」

「うん。黙っつてたけどね、あたし妊娠しちゃっつたの。」

「俊輔君に聞いたよ。どうして、」

凌さんが聞こうとした瞬間に姉ちゃんは遮る。

「凌には迷惑かけないからっつ。認知もしてくれなくっつていい。ひとり産むから。」

「どうして？ アメリカ行きたくない？」

姉ちゃんは下を向いたまま、首を横に振る。

「そうじゃないよ。凌と結婚して、子供を授かっつて、みんなですっつと一緒に暮らしていけたらどんなに幸せか。……ずっつとずっつと夢だっつたよ。あたしの『家族』。」

姉ちゃんは半泣きで言う。この前よりもまた少し大きく見えるお腹に手を当てて。

「だけど、怖い。あたし、賛成されなくてもいいと思っていた。だけど、違った。自分の家族と家族らしい会話さえ交わしたこともない。そんなあたしが出産や子育てできるのか、って。ましてや、言葉も通じない国で出来るのか心配。できっこない。きつと、凌におんぶに抱っこになっちゃうよ。そんなの、凌が苦しいだけでしょ？ あたしはそれでも笑って『大好き』って言うてくれる凌、見てられない。」

そこまで言うて姉ちゃんは床に座り込んで泣いていた。

「姉ちゃんも、俺とおんなじ。大馬鹿者だね。」

姉ちゃんと凌さんが啞然とした。

「俺、爺んところに行ったら、婆ちゃんと爺に姉ちゃんにそっくりだつて言われた。そのときはどうしてだろう？ と思つてた。でも、今それがわかった。俺、加奈に言われたんだ。『惨めなことは、いけないことなの？』ってさ。惨めなことがいけないと思うのは、そんなところを人に見せないようにしてきたからだつて。……きつと俺も姉ちゃんも知らないうちにそんな癖がついてたんだなあ、って思う。いいじゃん。凌さんのこと本当に好きなんだから結婚すればもつとみつともないとこみせればいい。軽い覚悟でプロポーズする男なんて、普通いないでしょ。もつと頼りにしてあげなよ。凌さんは姉ちゃんのそんな顔見てるほうが辛いと、俺は思う。」

凌さんは姉ちゃんの横に膝をついて、姉ちゃんを抱き寄せた。

「……傍にいてほしいんだ。抱っこでもおんぶでもいい。小萩が笑つてくれるなら、何にもいらないよ。小萩に出会ってから何度、君に救われたか僕はわからない。君がいない毎日なんて考えられないよ。」

凌さんは姉ちゃんの左手の薬指に指輪をはめる。姉ちゃんは涙でぐちゃぐちゃになった顔を上げて、凌さんと見つめ合う。それから、笑つて俺のほうを見る。

「シユン、あたし凌と結婚する。アメリカ行く！」

そう言つて俺に左手を見せる。姉ちゃんの笑つた顔は化粧が落ちてぐちゃぐちゃだったけれど、いつもよりかわいく見えた。

それから、三人で実家に帰つた。反対していた母さんは「おめでとう、私おばあちゃんになつちやつたのね。」と笑つた。姉ちゃんは「あら。紗雪おばあちゃんつてかわいいじゃない！」と言つた。みんな大笑いした。やっぱ姉ちゃんは馬鹿だ、と俺は呆れた。だけど、以前のようにそんな姉ちゃんを嫌いだとは思わなかつた。

凌さんは一旦、引越しのために東京に戻つていった。姉ちゃんは出発までの間、ここに残ることにしたらしい。最近、出産に関する本を読みまくつて、胎教とか食べ物とかについてぎゃあぎゃあと騒いで俺に絡みまくる。面倒だから「はいはい」と答えて適当に流そうと思う。姉ちゃんのことだ、どうせすぐに飽きるに決まっている。

出発の日、俺は姉ちゃんを空港まで車で送ることになった。車に乗るのは加奈を空港に送つていった時以来だ。俺は加奈が帰ってくるまで、車を運転するつもりはなかつた。加奈の香水のにおいが助手席に残っているような気がしていたからだ。誰かを乗せたら、匂いと一緒に残っている笑顔が薄れてしまひそうで寂しかった。これが在学中の最後の留学であつても半年は長いな、と思う。

玄関先で、母さんは姉ちゃんを送つた。

「……こつちのことは気にしなくていいのよ。あなたの人生なんだからね。それと、結婚式には招待しなさいよ。憎くたって一応、私が母親なんだから。」

少ししみりと母さんが言った。姉ちゃんは少し黙り込んでから、大人の話し方で答えた。

「あたし、母さんの子供でよかつたよ。自分勝手な娘で、喧嘩ばかりしたけど母さんのこと嫌いだなんて思ったことないからねっ。」  
姉ちゃんは後ろを向いたままそう言つてから、振り向いてにっこり笑つた。母さんは、

「馬鹿娘。」  
「  
と言つて目から涙をこぼした。」

助手席に座つた姉ちゃんは俺にふざけて言う。

「たのむから、事故んなよ。」

「ん。そればかりは運だからね。何ともいえないな。」

俺は冗談で返す。久しぶりに握つたハンドルは懐かしい質感だった。高速道路を走りながら、姉ちゃんは俺に話しかける。

「音楽かけていい？」

「ご自由に。ただし、クラシックは眠いから事故つても知らないよ。」

「失礼だなあ、こんなときは聴かないよう。あたしはロックが好きなの！」

そう言つて、姉ちゃんはブランキージェットシティなんか聴いている。

「まあ、クラシックより悪くない。」

「何かけたつて文句言うでしょ？ シュンは。」

姉ちゃん是不貞腐れる。まあね、そりゃそうだ。と心の中でつぶやいてアクセルを深く踏む。

出発手続きを済ませた姉ちゃんに、俺は飲み物を手渡す。

「ありがとう。」

今日の姉ちゃんはずいぶん寡黙だ。薬指の指輪がキラキラと輝いている。まるで姉ちゃんが手にいれた幸せの輝きみたいに見えた。

無言のまま時間は過ぎていく。俺の視界の中で人の波だけが生き物みたいに動いている。

搭乗アナウンスが聞こえてくると、姉ちゃんは立ち上がる。

「もう行くの？」

「うん。行く。……なあに、寂しいのぉ？」

姉ちゃんは、いつものように馬鹿っぽく、にいつと笑つて聞き返す。

「別に。」

俺が言つと、姉ちゃんは

「あつそ。」

と短く言った。

荷物検査のゲートに向かう前に姉ちゃんは立ち止まった。

「シユン！」

俺は姉ちゃんを見る。

「一回しか言わないから、聞きな。」

なんだよ、こんなときに。

人ごみの中で俺と姉ちゃんだけ浮いている気がした。恥ずかしい。

「あたし、シユンみたいな弟がいて本当に幸せだよ。」

そう言つて、姉ちゃんは背を向けた。俺は歩いていく姉ちゃんの背中に小さく手を振った。姉ちゃんの姿が見えなくなるまで、そこにいた。

俺も姉ちゃんがいてよかったと思うよ。……いつかそう言つてあげられる日も来るはずだと信じている。

照りつける日差しが俺に夏の中盤を知らせていた。空港の屋上は飛行機のエンジン音が響いていた。姉ちゃんの乗る、羽田行きの飛行機はまだそこにあつたが、何だか未練たらしい自分が嫌だつたので、俺は駐車場に向かった。

車の中はすっかり熱を蓄えていて、ドアを開けた瞬間、溜息が出た。キーを差し込んでエンジンをかけてエアコンを最大にする。俺は運転席に座るが、ドアを閉めずに考え事をする。

亜貴に電話をかけよう。

何故か猛烈にビールが飲みたい。加奈にも早く電話をかけてやらなくちゃ、きつと心配している。読みかけの本もたくさんある。見たい映画もいくつがある。……何だか、たくさん忘れていたことがあつて、この何日間の間にずいぶん俺は大人になつたような気がした。



大人になったというより歳をとったみたいな心境に近いが。

携帯電話が鳴る。おおよそ誰からかは察しがつく。通話ボタンを押してから、受話器を耳元にはこぶ。

「もしもし?」

その声で、俺の頭にはすぐにその人の顔が浮かぶ。

「あたし。加奈。」

ここ数日のことを、できるだけ説明してから加奈には謝ろうと思つた。寂しい思いをしただろうと思うからだ。何となく、会話は終わりに近づく。

「……それで今、空港なんだ。姉ちゃんを送ってきたとこ。」

「飛行機の音が聞こえる。」

「外国でも聞こえるんだな。」

加奈は何も言わない。怒っているのかもしれない。このところ、ずっと電話をかけていなかったのは事実だ。

「怒ってんの?」

加奈はまだ何も言わない。

「ねえ、加奈。何でもいいから言ってくれよ。」

「……怒ってないよ。ただ、羨ましかっただけだよ。小萩さんが、幸せになつて。」

俺は何も言えなかった。

「俊輔、あたしって嫌な女だよ。俊輔にそこまで大事にされてる小萩さんが羨ましいって思つたの。」

どう言つていいのか分からなくて、一瞬、沈黙が流れる。

「何て言つたらいいのかわからないけど、姉ちゃんのこと大切なのは、家族だから当たり前のことなんだ。……でも加奈は違う。家族でもなんでもない。だけど、大切に思える。ずっと言葉にしなくてごめん。俺は加奈がいてくれなかったら、こんな風に姉ちゃんのこと母さんのことも大切になんてできなかつたと思うんだ。」

加奈は悲しそうに言う。

「そういうことじゃないの。俊輔は優しいから、そんな風に言うけれど、あたしなんかでいいの？ お姉ちゃんにまで嫉妬したりして日本に帰ってきたらもっと酷くなるかもしれないよ？ そんなの疲れちゃうよ。」

「加奈。」

「だって、嫌だもん。そんな風に思われたくないもん。歪んでるあたしなんか見られたくないの。」

凌さんが姉ちゃんのない毎日なんか考えられないと言った気持ちが痛いほどわかった。

「加奈はずるい。俺がいなくなったら生きていけないって言ったくせに、俺のことはお構いなした。俺だって、加奈がいなくなったら生きていけないよ。」

「あたしだって嫌だよ。生きていけないよ。でも俊輔が辛いのを我慢してる方が見ていられないよ。」

「……だから、俺がいつ辛いつて言ったの？」

「言っていないけど……。」

「前まではそういうこと言わなかったけど、これからはちゃんと言うから。もう心配しなくていいんだよ。加奈には心配させてばかりだったけれど、もう大丈夫。俺は加奈がずっと一緒にいてくれるって信じてるから。」

「俊輔。」

「何？」

「大好き。」

何だかずいぶん久しぶりに加奈に大好きと言われたようで、自分でも何だか恥ずかしくなった。

「ねえ、俊輔？ あたしも小萩さんみたいなロマンチックな結婚できるかなあ？」

「あんなんでいいの？ もっとロマンチックなの想像しときなよ。」  
加奈の声色が一瞬にして変わる。

「ねえ、それって期待していいの？」

「さあ？ そればっかりはね。」

俺は加奈をからかう。加奈はいじける。

「いじわる。」

「今さら？」

ふざけて答えた。

「もういい。切る。」

怒った加奈はいつもより大きい声で言う。

「ごめん、許してよ。」

「許さないっ。罰として、あたしが日本に帰ってきたら空港まで迎えにくること！」

起こっていると思っていたので、あっけなくお許しが出て驚いた。

「全然、罰になってないけど。」

「いいの！ あたしこれから忙しいの。だから、また今度ね。バイ。」

加奈はほとんど一方的に切った。たぶん恥ずかしかったんだと思う。そんなところも加奈の愛すべきキャラクターだと思う。

家に帰ると、俺は疲れて眠ってしまった。目が覚めると翌日の昼過ぎだった。久しぶりにまともに眠ったせいかわいぶん爽快な気分だ。母さんは『三年寝太郎』と言って俺に呆れていた。そんな母さんを尻目に俺は亜貴に電話をかける。亜貴は喜んで夜の予定を空けてくれた。

店のカウンターで亜貴が手を振っていた。俺は隣に座ってから、亜貴と同じものごとバーテンに頼んだ。

「久しぶり。で、姉さん帰ったの？」

「それがさあ……。」

姉ちゃんが妊娠していたこと、結婚して渡米したこと、加奈とのこ

と。全部話し終えてから、亜貴に謝る。

「ごめん、ほんとに黙ってて悪かったよ。」

「ほんと、早くいいなよ。と言いたいとこだけど、俺も大変だったからね。お袋が風邪こじらして、マジでやばいかと思った。」

「今は大丈夫なの？」

「おう、ちゃんと元気になった。」

「そっか。」

ちよつとだけ俺たちは黙り込んでから、グラスの中身を喉の奥に流し込む。

「ところで、合コンはどうだった？」

「んー、まあまあかなあ？」

「食った？」

「あのねえ、そういう卑猥な言い方しないでよねえ。実際、いただきますしたけど。」

「かわいいコいたんだ？」

「あたりまえ！ 僕だって人をみますからね。かわいくないコは食いませんよ。」

「嘘だ。亜貴はかわいいと思うコには手、出さない。」

目を合わせると、亜貴が少しひるんだのがわかった。

「……さすが、シユン。冴えてるう。」

亜貴は誤魔化すようにまたふざけて言う。

「ねえ、なんで朱実さんと別れたの？」

「あ、イタタタ。古傷が。」

まだふざけて言う。俺は黙って亜貴を見る。目は口ほどに物を言う。「……わかったって。全部言うよ。」

亜貴はやつと真顔になってから、グラスの中身を一気に飲み干す。おかわりを頼んでから、話し始めた。

「俺が朱実のこと好きになりすぎちゃったから、別れた。別れ際のあいつ、かわいそうだったよ。俺のことで悩みすぎて、見てらんないくらいやつれちゃってさ。普段から、お前や加奈の話してた。そ

れは俺が朱実のこと、信じきって心配なんかしてなかったからだっ  
たんだ。本当に、加奈のことは妹みたいにしかなかったことなくて、  
だけど朱実はそう思えなかったみたいだった。それにタイミング悪  
くお袋の入院であんまり会えなくなつたから余計にさ。俺は、どう  
して朱実のそういう弱いところに気が付かなかつたんだろう、もっ  
と俺があいつのこと考えていればって、後悔して自分を責めた。『  
もう別れようよ』って言った朱実の泣き顔を見たら、俺はあいつの  
傍にいる資格なんてないと思つた。それだけなんだ。あいつを傷つ  
けるものや人から守らなくてはならなかつたのに、その努力を怠つ  
たどころか俺自身が追い詰める存在になつてた。」

「考えすぎだよ。それに会えなくなつた理由だって、朱実さんの勘  
違いだろ？ どうして弁解しないんだよ。」

「俊輔には分からないかもしれないな。全部、事実なものには違いな  
いんだ。俺はあいつのこと裏切つたことだつてあるし。」

亜貴の言つてることが分からなくはない。でも、どうして亜貴がそ  
こまで背負わなくちゃならないのだろう。

「亜貴がそれでいいんなら、俺は反対しないよ。いつか、亜貴は俺  
に言つたじゃないか。もつと素の自分を見せる練習がいるって。」

「……人のこと言えないよ。だけど、同じように終わつて欲しくな  
かつたんだ。こんな思いは俺だけで十分じゃん。」

亜貴はずつと考えていた。朱実がいた思い出を反芻しているように  
見えた。それから、笑つて言つた。

「シユンはちゃんと大人になつてるのに、俺は全然変われないなあ。」

亜貴は天井を見上げるように、首をそらせた。下を向いたら涙が零  
れそうだったのだろう。

俺はグラスの中身を見ていた。氷に乱反射する光……。焦点も定ま  
らずに、ただ屈折しているだけの光。

俺も亜貴もこの光と同じだ。器用になんて生きていけないのか  
もしれない。でも、俺は不器用なことがいけないとは思わない。こ

のグラスの中で窮屈そうにしている氷も、いつかは溶けて光はグラスの底を貫通するだろう。時間がかかってもいつか道は開かれるはずだ。それでも、不安は消えないから誰もが、悩み彷徨うのかもしれない。

あれからもう、四ヶ月近く経った。日も短くなってきて、秋も深くなって夏の日差しが懐かしく思える。俺は今、高速道路で車を走らせている。姉ちゃんを隣に乗せて以来だ。姉ちゃんはちゃんとおとなしくしているのだろうか。凌さんを困らせてないといいな。凌さんのことだから、きつと紳士的な解決法を見つけてるだろうけれど。二人の姿が頭に浮かぶ。俺はひとりで小さく笑ってみる。

駐車場に車を止めて到着ロビーを目指す。人がたくさんいて、こちまで心が落ち着かなくなる。少し早く着すぎたかもしれない。

到着ゲートからは次々と人が出てくる。俺は視線を集中させる。まだ出てこない。人の出がまばらになり始める。少しだけ不安になる。

「俊輔！」

そんな不安を取り除くように、加奈は笑って手を振る。半年前に立った時よりも髪は伸びていた。俺の前に立った加奈は嬉しそうに笑う。

「俊輔、しばらく見ないうちに男前になったねえ。」

何だよ、それ。第一声でそれはないだろ。変わったのは、お互い様だと思う。

「せっかく褒めてるのにつれないなあ。」

俺は鼻で笑ってから、加奈のスーツケースを持って歩き出す。

「帰ろうよ。一緒に。」

背を向けたまま言っと、加奈は手を取ってから俺の顔を見上げる。

「うん。」

一緒に過ごせなかった半年は、埋められない時間かもしれない。俺も加奈も半年前ここで別れたときから、ある意味では変わり果ててしまった。でも、この先、何があっても加奈が俺に教えてくれたことはずっと変わらない。加奈とつないだ左手の感触は、半年前に感じたもの比べてやさしい気がした。

街は冬の匂いでいっぱいだ。俺は加奈と手をつないで駅前の道を歩いていく。雪がちらついている空と灰色にぼやけた街並みが、道ゆく人の影だけを浮き立たせる。

「雪降ってきたね。」

「帰ろうか？ 姉ちゃんから連絡あったら大変だしね。」

今日は朝から電話のベルが鳴った。凌さんが少し落ち着かない声で『生まれそうなんだ』と言った。俺も朝から落ち着かない。加奈と散歩と称して頭を冷やすことにした。加奈も相当ソワソワしている。そんな様子を見てお互い笑い合う。家のドアを開けてリビングに入ると母さんはテーブルに座って頬杖を突いたままだった。

「お邪魔します。」

「あら、加奈ちゃん。いらっしやい。」

俺は加奈を座らせてからお茶を入れるためにキッチンに行く。そのとき、電話が鳴る。

母さんが急いで電話に出る。

「はいっ！」

俺と加奈は顔を見合わせて息を呑む。

「何だ、父さん？ あのねえ、まぎらわしいからしよっちゅう電話かけないでよ。連絡きたら電話するって言ったでしょ。ほら、もう切るわよ！」

どうやら爺からのようだ。三人とも溜息をつく。爺は三十分前に電話してきたばかりなのだ。

もちろん、あのときのお金を姉ちゃんは受け取らなかった。

「気持ちだけで十分だから。シヨン、これ婆ちゃんと爺ちゃんに返して欲しいの。」  
そう言っただけが預かった。その後、書留で送った。

夜が更けてきて、加奈は家に電話をかける。母さんが、せつかくだからみんなで待ちましようよ。と言っただけだ。待っているときに限って、時間が過ぎるのは遅いと思う。

日付も変わりかけた頃、電話のベルが鳴る。母さんは黙って電話に出る。俺と加奈はまた息を呑む。

「はい……。」

母さんは座り込む。俺は母さんの手から受話器をとる。

「もしもし。」

「あ、俊輔君？ お義母さん大丈夫？」

「たぶん。安心して力抜けちゃったみたいですけど。」

「そうなんだ。びっくりした。男の子だったよ！ すごく元気な男の子。小萩も今は休んでるけど、身体のほうは大丈夫。」

「よかった……。」

俺はその後の会話を覚えていない。ただ、嬉しさで頭の中がいつぱいだった。

受話器を置いたら、加奈は喜びでいっぱいなのか俺に抱きついて『やったあ』と声を上げた。俺は姉ちゃんに『おめでとう。』と心の中で言っただけから、産まれた子供のことを思った。

姉ちゃんは、退院して元気そうに電話をかけてくる。

「写真届いた？」

「うん、見たよ。」

「何か、この子あなたに似てるよね、って凌と言ってたの。」

「姉ちゃんにそっくりだよ。口元とかさ。」



「顔じゃなくって！ 何ていうか、こう……雰囲気とかさ。」

「写真で雰囲気なんかわかんないって。」

「でも、絶対似てるの！ というかあんたみたいな子供になったら嫌だから、ちゃんと育てないとね。シユンときたらほんとに愛想悪いし、かわいくないもの。」

母さんは大笑いする。姉ちゃん、声でかいよ。

「あ！ もう寝なきや。明日は大事な試験なんだ。」

俺は早々と会話を切り上げることにした。姉ちゃんのぎこちない日本語の愚痴は聞き飽きた。

「ふーん、あつそ。んじゃあね。」

結局、俺は以前目指していたサラリーマンになるのをやめた。サラリーマンは俺に向いていたのかもしれないけれど、そっちを選ばないのは……。

今の俺のことをここに書いたら『何も無い』と多くの人は思うかもしれない。でも、俺は以前のように、それが悲しいことだったり空しいことだと思ったりはしない。加奈が教えてくれたように、ただみつともなくてもいいと思うのだ。俺も、家族も。そして、この世界で生きているすべての人たちも。今あるべき姿が、必ずしも格好のいいものであるはずなんてない。

今はただ、亜貴と語り明かした夜のように待ち続けている。氷が溶けるそのときを。

氷が溶けたそのさきで、コップの底とテーブルまでやっと届く。そう信じていたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2474b/>

---

屈折光

2010年11月24日08時44分発行